

京都国立博物館の周辺

鴨川と東山の東の丘の間の七条エリアは、平安時代後期、後白河天皇（1127–1192）が法住寺を建てたときに繁栄しました。また、この地域は、平家の多数の住居の場所でもありました。平家は、12世紀後半に短期間この国を支配し、破壊され、近くの六原に本部を建てたライバルの源家に置き換えられました。後白河上皇と武将の平清盛（1118–1181）も、妙法院や蓮華王院などの地域の寺院のネットワークを構築しました。後者は彼の法住寺の複合施設の長でした。美術館から南の道を挟んで向かい側にある三十三間堂は蓮華王院の本堂であり、かつてその複合施設にあった多くの建造物から残っている唯一の建物です。博物館は今でも三方を主要な仏教寺院と神社に囲まれています。東は妙法院と智積院、北は豊国神社（豊臣秀吉に捧げられています）、南は妙法院の三十三間堂です。

16世紀後半、豊臣秀吉（1537～1598）とその相続人である秀頼（1593～1615）は、かつて後白河上皇の宮殿の一部であった土地に壮大な方広寺を建設するよう依頼しました。方広寺の見どころは、高さ19メートルを超える巨大な大仏で、奈良や鎌倉の大仏よりも大きいものでした。かつての都の主要なランドマークであった方広寺の大仏殿の痕跡は、ほとんど消滅していますが、寺院自体はまだ残っています。事実、平成知新館は、方広寺の旧南大門の跡地に立っています。かつて方広寺の西と南の境界をマークしていた巨大な石の壁は、博物館の南門（以前は正門）のすぐ北にあります。それらは神殿の過去の壮大さとその責任を負う指導者の力を思い起こさせます。